

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像

上 野 芳 久*

Le Bicentenaire de la Cour suprême française et son image réelle

Yoshihisa UENO

Pendant mon séjour à Paris, j'ai eu plusieurs fois l'occasion de visiter la Cour de cassation. Cette institution a célébré, à la fin du mois de novembre 1990, le bicentenaire de sa naissance. La cérémonie, l'exposition effectuée pour cette occasion mais aussi les manifestations des magistrats devant le Palais de Justice m'ont beaucoup intéressé.

C'est de là qu'est venu l'envie d'écrire cet article qui est une recherche consacrée à l'évolution de la notion de cassation, à l'organisation et à la fonction de la Cour, les formidités du pourvoi mais également à l'image réelle que j'ai perçue de cette institution par ma visite.

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 一 はじめに 二 沿革——200 周年 <ul style="list-style-type: none"> (一) 破棄の形成と確立 (二) 破棄裁判所 (三) 破棄院 三 現代の破棄院 <ul style="list-style-type: none"> (一) 人的組織 (二) 機能・機構 <ul style="list-style-type: none"> (1) 裁判機能 (2) 司法行政機能 (三) 破棄手続 | <ul style="list-style-type: none"> 四 判例の 200 年 <ul style="list-style-type: none"> (一) 主な判例 (二) 主な刑事事件 五 破棄院の実像 <ul style="list-style-type: none"> (一) 破棄院の内部 <ul style="list-style-type: none"> (1) 刑事部の法廷 (2) 聖ルイ像 (二) 式典と司法官の示威運動 (三) 200 周年記念展示会 (四) 広報活動 六 おわりに |
|---|---|

一 はじめに

私は、別の機会に、留学報告の一つとして、パリにあるいくつかの刑事裁判所を視察したときの様子を書いたことがある¹⁾が、その際には、かんじんの破棄院について、当時の視察対象でなかったこともあり、ほとんど触れることができなかった。しかし、その後パリ滞在中に、同刑事部の法廷を傍聴したり、破棄院 200 周年記念展示会に足を運ぶなどの機会があった。そこで本稿では、破棄院について、歴史を多少検討してから、若干の感想をまとめ、もって前報告を補うこととしたい。

一昨年 (1990 年)、奇しくも日本で裁判所制度 100 周年が祝われたその年に、フランスの破棄院は創設以来 200 周年を迎えた。その記念として、パリではさまざまな歴史的資料をそろえた展示会が開催され、いくつかの新しい文献も出版された²⁾。その意味ではこの辺で、もう一度、フランスの破棄院について考察しておくことも無駄ではないように思われる。

* 教養課程 助教授

平成 4 年 10 月 20 日受付

1) 拙稿「パリの刑事裁判所」国学院法研論叢 18 号 (1991 年)。

2) たとえば① *la Cour de Cassation 1970-1990*, Cour de Cassation, 1990 は、200 周年記念展示会のカタログであるが (以下カタログとして引用) 簡潔に破棄院を知りうる文献として有益である。また② *Le Tribunal et la Cour de Cassation 1790-1990*, Litec, 1990 (以下リテク版として引用) は、大型の豪華本で、興味深い 16

また、おりしもその記念式典の最中(11月30日)に、パレ・ド・ジュスティス前で、フランス司法史上初めてといわれる大規模な司法官(magistrat)、弁護士らによるデモが行なわれ、警官隊と対峙するという事態が生じた。一体何故そんなことになったのだろうか。破棄院を頂点とするフランスの司法を理解するためには、その意味を検討しておく必要もあると考える。

ところで、本稿の標題をフランスの「最高裁判所」³⁾としたが、ここで最高裁判所とは、パリのシテ島にある破棄院(Cour de Cassation)のことである。実は、現在、フランスには「最高裁判所」という名称をもつ裁判所は存在しない⁴⁾。では、何故「破棄院」とせずにこのような標題にしたのかといえ、第一に、破棄院とその前身である破棄裁判所(Tribunal de Cassation)とを合わせた総称としては最高裁判所の名称が適当と考えたからである。第二に、破棄院の判断に対しては、それより上級の裁判所に上告する制度はないのであるから、その意味では破棄院を最高裁判所と呼ぶのもあながち的外れとはいえない⁵⁾。第三に、事実、その意味からフランスでも最高裁判所(Cour suprême)と称されることが多い⁶⁾

本の論文のほかに、歴代院長の名簿、関連法令・文献リスト、美しい図版などが掲載されている。1990年11月28日～30日に開催された記念式典の様子は③ *Bicentenaire de la Cour de Cassation*, Documentation française, 1991(以下式典記録として引用)にまとめられており、各講演者の写真が付いた12本の講演記録が興味をそそる。

3) フランスの最高裁判所に関する邦語文献については、別稿「フランスにおける破棄概念の形成」國學院法政論叢14輯(1993年3月予定)参照。

4) アンシャン・レジーム時代には「最高法院(Cour souveraine)」(最高裁判所と訳されることもある)という名称が存在し、高等法院(Parlement.これが最高法院と訳されることもある)と最高評定院(Conseil souveraine)両者の総称として使用された。尤もこの最高法院は、国王と国王顧問会議(Conseil du Roi)に従属していたので、実は「最高」ではなかった。そこでルイ14世はその自称を禁じ高等裁判所(Cour superieur)の語を使用させたといわれる。オリヴィエ・マルタン(堀浩訳)『フランス法制史概説』791頁(1986年)。

なお、当時の裁判所組織につき、拙稿「フランスの刑事司法の歴史」相模工業大学紀要23巻2号167頁(1989年)。

5) 山口俊夫『概説フランス法 上』279頁(1978年)。

6) たとえば、ある法律用語小辞典は、「司法ピラミ

のである。そして最後に、短期間ではあるがフランスに滞在してみて、フランス人が破棄院と言われて想起するその地位は、日本人が最高裁判所に対してもつ印象とはほぼ同様のよう感じられたからである^{7),8)}。

もっとも、周知のとおり、フランスでは大革命以後、行政裁判権は司法府から分離され⁹⁾、行政権に属している。つまり、行政裁判権をもつ最高裁判所としては、破棄院とは別に、コンセイユ・デタ(Conseil d'Etat)という機関が存在する。その意味では、フランスには最高裁判所が二つあることになるが、本稿の対象は、司法裁判権を有する最高裁判所である。

以下、まず破棄院200年の沿革、組織・機能を見た後、破棄院を自分の目でみた感想を述べてみたい。

ッドの頂点である破棄院は、わが国の司法制度の最高の裁判所(la juridiction suprême)である」とする。DELAFAÏE, *Le petit RETZ de la judiciaire*, 1989, p. 42. また、「(破棄院は)司法界ではしばしば最高裁判所(Cour suprême)と呼ばれる」とする文献もある。ESTOUP, *La Justice française*, Litec, 1989, p. 249. その他、教科書はもちろん、新聞などでも最高裁判所の表現はよく使われる。

7) たとえば、第一に、裁判官の出世のしかたをみると、日本における最高裁と同様に、破棄院が最高到達点であり、年齢・経験を重ねるごとに大審裁判所から、控訴院そして破棄院へと階段をのぼっていく。PERROT, *Institutions judiciaires*, 2éd., 1986 p. 220. 山本昭彦「フランス司法見聞録(1)―司法制度の概観―」判例時報1432号16頁(1992年)。その職階表は、DELAFAÏE, op. cit., p. 108にある。

第二に、大学等における研究対象としても、ちょうど日本でもよく最高裁判例が研究されるように、破棄院判例は重要視される。たとえば、パリ大学大学院生(D. E. A.)の刑法ゼミ(ソワイエ教授)の研究対象はほとんど破棄院の判例であった。

第三に、新聞などでの破棄院判例の扱い方も、日本の最高裁の場合と同様に、下級審と比べ大きく取り上げられる。

8) 破棄院は最高裁判所か、は一つの問題点であるが、これを比較法的観点から論じている文献として、PICCAT et COBERT, *La Cour de Cassation* <Que sais-je?>, 1986, p. 24 et s.

9) かつての国王(行政権者)に対する高等法院(司法権者)の反抗が遠因となり、行政裁判権が司法権から分離された。この間の事情については、PICCAT et COBERT, op. cit., p. 20 et s.

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像（上野芳久）

二 沿革——200 周年

200 周年というのは、1790 年に破棄裁判所が設置された時から起算し、1804 年に破棄院と改称され、1990 年にいたるまでを意味する。しかし、破棄という手続はそれ以前から徐々に形成されてきたものであり、制度としてはすでにアンシャン・レジーム末期に国王顧問会議の規則の中で確立されていた。それが革命後も、破棄権限を国民の裁判所へ移し、制度目的を変えることにより、生き延びたのである。その後も裁判所は少しずつ変化し続けた。本章では、このような変化につき検討する。

（一）破棄の形成と確立¹⁰⁾

13 世紀に封建制が完成するとルイ 9 世は、決闘や神儀から訴訟手続を解放し、人間の理性に紛争の解決を委ねた。その時から裁判には不測の誤りが入り込む可能性を生じ、王は誤った裁判を修正することにした。実際にその任に当たったのは王会やそこから分離した司法専門機関（後の高等法院）であり、しかもそれは自ら終審機関として判断を下した。したがって、それは未だ終審裁判の取消という破棄の特徴を備えておらず、控訴手続にすぎなかった。しかし、高等法院が王会から分離すればするほど、それはもはや王の判断とは言えなくなる。判決に不満な人々は、直接、国王や顧問会議に訴えることを望むようになる。

13 世紀末、訴訟が増加し問題も専門化するにつれ、高等法院 (Parlement) は王会から完全に分離独立する。そんな中で、終審の判断といえども再び審査の対象になりうるものが明らかにされ、実務では、高等法院で「誤判の申立 *proposition d'erreur*」の手続が生まれ司法慣習として定着していった。14 世紀中頃、この申立は、終審判決の取消の性質をもち、本案判決に対する顧問会議への出訴制度であることが明らかにされた。

15 世紀以降、誤判の申立が制限されるようになると、「民事請求 *Requête civile*」と「移管 *évocation*」が登場した。民事請求は、当事者に帰責事由がある事実の誤りについて認められた救済で、当時は、国王に対し救済の特恵を求める手続だった。移管は、訴訟の途中で、王が、自分や顧問会議などに事件を移す制度である。顧問会議の多数勢力と同じ派に属している訴訟人にとっては、移管は大変好都合だったのである。

その後、誤判の申立はますます利用されなくなり、民事請求に代わっていった。15 世紀末、終審裁判に対する救済手段は混乱をきわめ、高等法院の負担増大、訴訟費用増大、裁判遅滞などをまねいたが、その解決方法として発展したのが移管である。この移管は、16 世紀前半には、原判決がオルドナンスの手続遵守を怠った場合に原判決を無効にする手段と考えられるようになった。

初めて破棄 (Cassation) を認めた法は 1579 年のブローアのオルドナンスであるが、その規定からは破棄とは何かが不明確だった。しかし次のように考えられた。終審判決を訂正する手段は取消 (*rétractation*) と破棄の 2 つのみであり、取消の具体的手段として、誤判の申立と民事請求の 2 つがある。破棄は、顧問会議の移管から発達したもので、オルドナンス違反の判決を無効にする手段である。

17 世紀前半、複雑な法律・裁判手続で司法界は混乱したが、国王は体制をたて直し強力な国家を作る。1667 年、司法改革の一つとしてルイ 14 世は民事王令を制定するが、その第 35 編は全て「民事請求」に当てられた。同令により、誤判の申立は廃止され、なるべく終審判決の取消を減らすべく民事請求も制限された。他方、破棄については何ら規定されなかったが、消滅したわけではなく、国王の、裁判官の法遵守をコントロールする手段として生き続けた。以後、破棄は顧問会議の発展とともにあり、その手続規定の中に組み込まれていった。17 世紀後半には破棄申立の増大により混乱が生じたため抑制策がとられたが、混乱を整理し、個人の申立を容易にしようと実務を踏まえて編纂されたのが、大法官ダゲソの手になる 1738 年の顧問会議規則である。これにより破棄は制度として確立し、以後革命までその基本的性格を維持し続けるのである。

（二）破棄裁判所

破棄は、顧問会議によりその手続の中で確立されたが、顧問会議は、国王の影としてその留保裁判権を行使する機関にすぎず、普通裁判所でも訴訟裁判所でもなく、ただ特別に破棄する任務を負っていただけだった。そこで高等法院は次のように批判した。破棄制度は、①顧問会議規則に依拠し何ら明確な法に根拠をもっていない、②顧問会議が行っており真の裁判所が行使するものではない、と。他方、モンテスキュ流に考える人からも、③裁判権が立法権・行政権から分離されないのなら自由は存在しない、と告発された。

10) 破棄概念の形成過程の詳細については、文献も含め、別稿にゆずる。拙稿前掲注 3) 論文。

では、破棄は一気に廃棄すべきものか。しかし破棄は、迫害された無実の人の最後の救済手段としては有効である¹¹⁾。また、法は絶対最高のものだと考える¹²⁾以上、裁判官による法の尊重を確実にする必要があり、そのためにも破棄は有効・必要と解された。さらに、全国の裁判所を監督する機関も必要だったのである¹³⁾。

フランス革命は、一方で、留保裁判権を消滅させ、上記のような批判を受け入れることを可能にし、他方で、破棄の目的を、国王の権威の防衛から法の尊重に変えて、破棄制度を維持することを可能にした。破棄は、国王の統治手段から裁判所の法解釈統一手段に目的を変えることによって、生き続けたのである。

1790 年、革命直後から議論されてきた司法制度がようやく 8 月に新制度としてまとまり、10 月に高等法院が一切の活動を停止すると、憲法制定会議は破棄裁判所 (tribunal de cassation) を創設した¹⁴⁾。このように破棄裁判所は、もともと上級審として設置されたのではなく、顧問会議の破棄の権限を革命の趣旨に適合するように変更し、制度化したものであった¹⁵⁾のである。

問題となったのは、破棄裁判所の組織である。権力分立を基礎にする新憲法の中にどう位置づけるべきか？ 司法府の頂点に立つものとすべきか、あるいは立法府の下に置くべきか？ 激しい議論がたたかわされた。破棄とは判決の法律適合性を保障することであり、立法府の

ために司法府を監督することなのであるから、破棄は立法府の権限とすれば足りるとする説さえあった¹⁶⁾。たしかに、かつて高等法院 (司法府) が顧問会議 (立法府) に対立し混乱を招いたことを思い出せば、司法府に対する不信感が拭いきれないのも理解できた。しかし結局、議会は裁判所という形の必要性・合理性を考慮し、それを維持した。ただし立法府に付置することにし¹⁷⁾、しかも、破棄裁判所は事件の本案を審理することができないとして、反対派の立場をも考慮したのである。

こうして、破棄裁判所は、現在の破棄院にも引き継がれる伝統的特徴、すなわち、①第三審裁判所ではない、②事実は審理しないという特徴を備えたのである。

立法府に付置された点は、現在の破棄院との大きな相違点だが、これも次のように変化していった。当初、上記の経緯から、破棄裁判所はただ下級審裁判官の法違反にのみ着目し、判決には何らコメントを付けず条文のみを引用した。法の解釈は一切許されず、それは立法府のみが持つ権限であり、したがって、法解釈が必要な場合には立法府に解決を委ねること (レフェレ制度) とされた。だが、破棄裁判所はすぐに判決に理由を付すようになった。他方、はやくも 1791 年の法は、刑事法につき、法違反だけではなく誤った法適用に対しても破棄の開始を認めた。これは民事法にも拡大された。無口な法の番人は法の通訳者になり、少しずつ指導的判例を作りだすようになったのである¹⁸⁾。その後 1799 年まで、破棄裁判所はしばしば権力闘争的となり、政治的大混乱にほんろうされはしたが、1800 年には、立法府に対する自律性を認められ、下級審の判例を全国的に統一する裁判所として、司法裁判所の頂点に立った¹⁹⁾。

11) 破棄は、たとえば 1786 年に 3 人が車刑を言い渡された事件で支持され、「モンターニュからの手紙」の中でルソーにも賞賛された。HALPERIN, *Le Tribunal de cassation sous la Révolution (1790-1799)*, 1990, p. 25. (前掲注 2) リテク版所収)。

12) 1789 年当時の人々がいかに法を尊重しようとしていたかについては、HALPERIN, *Histoire de la Cour de Cassation: du Tribunal de Cassation à la Cour de Cassation*, p. 120 et 121 (前注 2) 式典記録所収) 参照。

13) 破棄制度は、憲法会議がまさに作ろうとしている 547 のディストリクト裁判所を監視し梓にはめるために必要なものとして、置かれた。HALPERIN, *op. cit.*, n. 1, p. 27.

14) 1790 年 11 月 27 日～12 月 1 日デクレ。この間の司法制度改革の動きについては、拙稿・前掲注 4) 論文 133 頁以下参照。

15) 石川良雄『フランスの司法制度』司法研究報告書 13 輯 2 号 11 頁 (1962 年)。なお、顧問会議と破棄裁判所の法的連続性の根拠は、1790 年 11 月 27 日のデクレが、① 1738 年規則を破棄裁判所に

も適用するとしたこと (この規則は現在も効力をもつ。山口・前掲書 347 頁)、②顧問会議は、破棄裁判所が設置された日に廃止されその機能を停止することを規定していること、の二点である。POUILLE, *Le pouvoir judiciaire et les tribunaux*, 1985, p. 369.

16) ロベスピエールは立法委員会を置けば足りると考えた。これに対しメルラン・ド・ドゥエは、裁判所を置くべきだと主張し、これが 1790 法に採用された。HALPERIN, *op. cit.*, p. 123.

17) 刑部荘「破棄裁判所の任務と性質」『杉山教授還暦祝賀論文集』7 頁 (1942 年)、野田良之『フランス法概論』606 頁 (1955 年) など。

18) HALPERIN, *op. cit.*, p. 122.

19) PICCAT et COBERT, *op. cit.* n. 8, p. 15.

(三) 破棄院

1804 年 5 月、破棄裁判所は破棄院という名称に変更された。この年は、3 月に慣習法を集大成したナポレオン民法典が完成し (いわゆる中間法時代の終了)²⁰⁾ 12 月にはナポレオンが皇帝になった年でもあった。

これ以後、各地の慣習法が優先される法不統一の時代は終わり、全国に統一的に適用される成文法の優越性が確認されていく。それは破棄の“法を統一する機能”が高まることを意味し、制度としての破棄はいよいよ完成度を高めていく。院 (cour) という旧時代の語句こそ復活したが、そして、かつての顧問会議の承継者のごとく多くの特権を享受することもあったが、すでに新司法秩序にしっかり根を下ろした破棄制度自体はその本質を変えることはなかった²¹⁾。

成文法時代がくると、破棄院は解釈の統一を確実にすべく自らの解釈権を拡大するようになる。さらに破棄申立数が増大すると、破棄院はますます判例形成の機能を強化していった。逆に、もはや法解釈の仕事は量的にも能力的にも立法府の手におえなくなり、レフェレも事実上機能せず、ついに 1837 年に廃止された。今や破棄院は立法府の傘下から飛び出して司法府の長となり、機能的には「成文法を越える時代」²²⁾、「立法機能への参加の時代」²³⁾を迎えたのである²⁴⁾。

以後、破棄院は法解釈の統一をはかる法律審としての基本的性格を変えなかった。ただ、破棄申立件数の増加に悩み、20 世紀に入ってから何度も組織・構造を修正していくが、これについては次章で扱う。

20) 山口俊夫「フランス法学」碧海他編『法学史』193 頁以下 (1976 年)。

21) HALPERIN, op. cit. n. 11, p. 124. 破棄院となつてからの様々な特権について、PICCAT et COBERT, op. cit., p. 14.

22) HALPERIN, op. cit. n. 11, p. 122.

23) CHOUCROY, *Du Tribunal de Cassation à la Cour de Cassation*, p. 34 (前注 2) 式典記録所収)。これは、破棄を①立法権の確認としての破棄——破棄裁判所と成文法の優越性と、②立法機能への参加としての破棄——最高裁と法の一般原則の出現、とに分けている。

24) この破棄の創造的権能は、暗黙のうちに法で承認されたともいえる。なぜなら、裁判官は、違反すれば裁判拒絶となってしまうので (民法 4 条)、法の欠陥を補うことを要求されているといえるからである。CHOUCROY, op. cit., p. 35.

三 現代の破棄院

200 年の歴史を経た現在、破棄院はどのような組織でいかなる機能を果たしているか。国王顧問会議から発達したという破棄院の歴史的特色は、人的組織や機能のうえにも反映しているように思われる。

(一) 人的組織

(1) 裁判官・検察官

司法官の定員はデクレで定められる²⁵⁾。

院長 (Premier président) 1 名、

部長 (président de chambre) 6 名、

裁判官 (conseiller) 84 名、

調査裁判官 (conseiller référendaire) 37 名、

調査官 (auditeur à la Cour de cassation) 18 名、

検事総長 (Procureur général) 1 名、

次長検事 (premier avocat général) 1 名、

代表検事 (avocat général délégué) 2 名、

破棄院付検事 (avocat général) 19 名

院長は、司法界の中で最高の地位を占める司法官である²⁶⁾。その地位には純裁判権が伴うわけではないが、場合によっては、破棄院の一つの部において法廷を主宰し、判決作成に参加することができる²⁷⁾。他方、広範な司法行政権を有し、破棄院の良好な機能の監督、裁判官の各部への配属、各部の任務内容の決定、合同部・大法廷への回付決定などを行う。なお、裁判官の懲戒委員会として司法官職高等会議が開かれるときは、その会議を主宰する (憲法 65 条④項)²⁸⁾。

6 名の各部長は、それぞれの部の法廷を主宰するのを本務とするが、他にも、事件を各裁判官に割り当て、部全体の判例の総括をする。また、理事部に参加し、大法廷にも出廷する²⁹⁾。

25) Décret no 90-1086 du 5 décembre 1990.

26) PERROT, op. cit., p. 218.

27) 院長が判決に関与する場合は、よほど複雑な事案であるか、後に判例となるような原理的判決 (例、代理母事件、後述 163 頁) であることが多い。PERROT, op. cit., p. 219.

28) PERROT, op. cit., p. 219.

29) PERROT, *ibid.* なお最古参裁判官 (doyen) という資格もある。任命時から最も長期間その職にある裁判官のことで、単なる名誉称号ではなく、部長が欠けたとき部の法廷を主宰したり、判決案をチェックしたり、重要な機要を果たす。Ibid.

裁判官は事案の審理・判決をする。出世の階段をのぼりつめた司法官である。80 年半ば頃から、おそらく調査裁判官と区別するため、高位裁判官 (hauts conseillers) と呼ばれる慣行ができた。

調査裁判官は、1967 年には申立件数増加への対応策として創設されたもので、若い司法官から任命され、破棄院裁判官の仕事に援助する。具体的には、①書類の検討、②一定の簡単な事件についての報告書提出、③場合によっては判決の起案などをする。当初は、担当者が若いという危機感からその役割は比較的軽く、判決評議会に出席できても発言権しか持たなかったが、78 年、その信頼性と必要性が認められて権限が拡大され、自分が報告者となった事件については決定権を持つようになった。さらに、一定の場合には、判決法廷の定足数不足のときに裁判官の代わりとなりそれを満たすこともできるようになった³⁰⁾ (司法組織法典 L131-7 条)。

調査官は主に司法行政関係の仕事をする。文献、研究、情報調査などである。調査裁判官の権限が拡大し、司法行政面からより知的な仕事に移行したのに伴って、手薄になった仕事を補充する必要から置かれた。調査裁判官より低位の若い司法官があてられる³¹⁾。

検事総長は、破棄院検察官の長 (chef du parquet) であり、破棄院のどの部においても発言できる。理事部のメンバーであり、大法廷に出廷する権利をもつ。検事総長の職務執行を補助する破棄院付検事は、各部に配属されている。その他、検事総長を補助するのが次長検事であり、次長検事を補助するのが代表検事である³²⁾。

(2) 弁護士

弁護士は法律上の破棄院の構成員ではないが³³⁾、破棄院には独占的に訴訟代理権を有する弁護士がいるので、ここでふれておく。破棄院およびコンセイユ・デタ付弁護士 (Avocats au Conseil d'Etat et à la Cour de cassation) がそれで、破棄院 (およびコンセイユ・デタ) では原則としてこの弁護士に依頼することになる。

もっとも通常の裁判所で弁論する権利をもつので、その特殊性は、弁護士経験 3 年以上、破棄院の認許などの諸条件にとどまり、以前ほどの特殊性は薄れた³⁴⁾。

このような弁護士が存在するのは歴史的理由による。アンシャン・レジーム時代、国王顧問会議へ提訴する訴訟関係者の代理人として独占権を持っていた弁護士の団体から出発し、アンリ 3 世時代 (在位 1574~89 年) に、特別の伝統・規則・登録制度をもつ独立の団体として発達した。革命後、顧問会議は消滅したが、この団体は生き残り、19 世紀初め、破棄院付弁護士 50 人とコンセイユ・デタ付弁護士 22 人 (多くは前者との兼人) が合併し 60 人からなる一つの団体となったのである。1817 年のオルドナンスは、その地位を承認し、破棄院とコンセイユ・デタの 2 個の資格を 1 個としたが、それは、両機関での訴訟手続が類似していたということのほかに、公法と私法の両者に関与できる弁護士の存在が必要であった、という理由による。1978 年以降、構成員は 60 人から 90 人となった。

その存在意義は、破棄院やコンセイユ・デタでは主に法律問題が争点となるので、このような専門職を置くことによって手続を円滑にすることができる³⁵⁾点にあり、近時の破棄院における申立件数の激増を少しでも減らすことに貢献している³⁶⁾。

(3) 書記

書記長 (Greffier en chef)、書記官 (greffier de chambre) は法律上の破棄員の構成員である (司法組織法典 L121-1 条)。前者の指揮のもと、後者は各部に配属される。

(二) 機能・機構

破棄院の現在の機能をみる前に、なぜ現在の破棄院は、3 民事部・社会部・商事部・刑事部という合計 6 つの部で構成されるようになったのか、その沿革をみておこう。

30) 1967 年 2 月 20 日の組織法。調査裁判官の権限を拡大したのは 1978 年 7 月 12 日法。POUILLE, op. cit., p. 371; PERROT, op. cit., p. 221.

31) PERROT, op. cit., p. 221.

32) PERROT, op. cit., p. 222.

33) その地位については、山本・前掲論文 (1) 16 頁の「フランス法曹制度の概要」図を参照。

34) 山口・前掲書 292, 350 頁。山本・前掲論文 (1) 17 頁。

35) したがって、学者的な傾向が強く、論文を執筆したり、判例等のデータベース形成にも熱心だとされている。山本・前掲論文 (1) 17 頁。

36) 以上の説明は、前注 2) カタログ 73~4 頁による。

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像（上野芳久）

〔安定期から改革期へ〕

破棄裁判所時代の後半から、審理部・民事部・刑事部の 3 部に分けられ³⁷⁾、民事事件と刑事事件を別個に扱うことによる機能の効率化がはかられた。これは破棄院となつてからもそのまま維持され、約 150 年にわたる安定性を示した。

しかし、破棄申立の数は徐々に増えはじめ、1935 年には平均の訴訟遅延期間 44 カ月という過去最悪値を記録してしまった³⁸⁾。以後、申立件数の増加に対する対策が次々と試みられ、破棄院の歴史は“訴訟遅滞との戦いの歴史”という様相を呈した。

〔構造 (structures) の改革：1938 年～67 年〕

まず構造面が改革された。1938 年、労働問題を処理する社会部 (chambre sociale) が設置されたが、とくに戦後、フランスがドイツ軍から解放されると、法律も訴訟数も激増してすぐ問題が再発した。そこで 47 年、審理部が廃止され、代わりに商事部 (chambre commerciale) が置かれた。元々審理部は、予め不必要な訴えを除去して裁判を迅速化するための部だったが、他の部に対する一種の劣等感から解放されようと審理を慎重にや

りすぎたため、却って訴訟遅滞を招いていたのである。他方、民事部・社会部・商事部と 3 つになった民事部の間で判決が不統一になるのを避けるため「民事大法廷 (assemblée plénière civile)」が置かれた。

しかし、それでも訴訟遅滞は増え続けた。47 年に 5646 件だった遅滞件数は、52 年にはほぼ倍の 1 万 2000 件に達した³⁹⁾。同年、次の策として、特に遅滞の激しかった民事部門に第二の民事部が増設され、さらに 67 年には第三の民事部が設置された。同時に、いまや 5 部に増えた民事系部門で判例の統一性を維持するために、従来の民事大法廷に代えて「合同部 (chambre mixte)」が置かれた。また、下級審と破棄院で意見が対立する問題について判例を形成する役目をもつ「大法廷 (assemblée plénière)」が置かれ、従来の連合部 (chambres réunies) は廃止された。こうして現在の 6 部体制が完成した。しかし、申立件数の増加はまだおさまらなかった。

〔機能 (fonctionnement) の改革：1967 年～81 年〕

しかし、これ以上部を増やすことはできない。予算上の限界もあるし、破棄院の統一性も害される。さらに、本来法解釈を統一するための破棄院なのに、その内部で判例がバラバラになるおそれも大きくなるからである。そこで着目されたのが機能面の改革である。

まず 1967 年、若い司法官の中から「調査裁判官 (conseillers référendaires)」を任命し、破棄院裁判官の仕事を援助させる制度が作られた。また 84 年には、司法行政の仕事をする「調査官」も置かれた。これらの人員増加策に対して、一定の仕事について少人数化・軽減化を行うことによって裁判官の時間を節約する方法も考えられた。たとえば上記の大法廷設置 (1967 年) もその一つであるが、ほかにも、各部に昔の審理部のような役をはたす審査法廷 (formation restreinte) を置き (1979, 1981 年)、判決言渡しの定足数を 7 人から 5 人に減らした (1981 年) ことなどである。

〔それ以後の状況〕

以上のような破棄院の懸命の努力にもかかわらず完全な解決には達していない。これほど申立件数が増加し続ける根本的な理由は、訴訟状態をより長く保つため、最後のチャンスに賤けるためといった、本来の破棄院の機能とはおよそ関係のない意図に基づく申立が多いからだ

37) 正確に言えば、当初、破棄裁判所は、「審理部 (bureau des requêtes)」と「破棄部 (section de cassation)」の 2 部制度をとっていた。審理部が予審的な機能をはたして事案を選別し、破棄部が判決機関の機能をはたしたのであり、いわば縦に分割されていたといえる。しかし、その後 1795 年の法律により、破棄裁判所は審理部・民事部・刑事部の 3 部に分割された。縦の分割制度は民事事件については維持されたが、刑事事件については、別個に審理部を経ずに直接事案を取り扱う「刑事部」ができたのである。その意味では横の分割が加えられたことになる。なお、破棄院の時代に入って 1826 年、部の名称は section から chambre に変えられた。山口『概説』347 頁、石川・前掲書 30 頁。

38) POUILLE, op. cit., p. 369. これによれば、1810 年には、48 人の司法官が 1 年間で約 250 件につき判断し、訴訟遅滞期間は平均 24 カ月だった。その後、事件数は、451 件 (1851 年)、2000 件 (1920 年)、2520 件 (1936 年) と激増した。原因としては、①下級審の訴訟件数自体の増加、②法規の数が激増ししかもそこには解釈上問題が多く残されて解決に時間がかかること、③置かれている救済手段はすべて利用しようとする現代人の心理、④それを思い留まらせようとする意思が立法府にも司法府にもないこと、などが考えられる。PERROT, op. cit., p. 211.

39) PERROT, op. cit., p. 215.

との指摘もある。根源から問題を解決しなければいくら破棄院を改革しても追いつかないが、名案はないようである⁴⁰⁾。

以上のような沿革から 6 部で構成される現在の破棄院は、次のような機構の下で、さまざまな機能を果たしている。以下、機能を大きく裁判機能と司法行政機能の二つに分けて検討する。

(1) 裁判機能

(a) 部・通常法廷・審査法廷

部 (chambre) は、それぞれ部長 1 名、院長が配属する裁判官約 15 人と調査裁判官約 4 人、検事総長が配属する検察官約 4 人、その他で構成され、担当する事件につき法廷を開いて裁判する。

法廷は部長が主宰し、原則として公開であるが、必ずしも全裁判官が出廷するわけではない。各裁判官には、事件を割り当てられた後、書類に読み充分に検討する時間が必要だからである。ただし通常法廷 (formation habituelle) の場合、有効に判決を言い渡すためには定足数 5 人の出席が必要である (司法組織法 L131-6 条)⁴¹⁾。

審査法廷 (formation restreinte) は、各部の中に、受理できない申立、明らかに理由のない申立を棄却するために、3 人の司法官で構成される組織として、1979 年法により創設された。かつての審理部 (前述 000 頁) のようないわば濾過装置であるが、うまく機能しなかった審理部を復活する代わりに創設されたわけである。しかるに、一定の部が示した冷たい態度⁴²⁾と、1981 年の法改正とにより、創設時の考えは一変した。院長、部長は、一定の場合 (申立の解決が必要と思われる場合で、当事者もしくは裁判官が反対しない場合)、審査法廷で判決を言い渡させることができることになったのである。もはや、濾過のためではなく、5 人のところを 3 人で可とす

る「値引き」法廷に堕してしまったのである⁴³⁾。

(b) 合同部・大法廷

どちらも申立件数増加に対する対策として改正により設置されたことは前述した。

一個または数個の問題が複数の部に関係してくる場合、そのままでは部ごとに判断が異なるおそれがある。それを回避すべく、複数の部の裁判官が集まって問題を検討するために開廷される方式が合同部 (chambre mixte) である。構成員は、院長、部長、関係する部の最古参裁判官、関係する部の代表裁判官 2 名ずつの計 9~25 名である⁴⁴⁾。一定の場合、院長または当該部は合同部に回すことができるが、当該部で可否同数のときや検事総長が求めるときは、当然に合同部で審理されることになる⁴⁵⁾。

大法廷 (Assemblée plénière) は、破棄院と下級審とで意見が対立する場合、すなわち原判決が破棄された後に審理した第二の下級裁判所の判決に対して、同じ理由から二回目の破棄申立があった場合に、開廷される。このような場合、以前は連合部が開かれたが①破棄院の全裁判官の集合、②判決有効の定足数が 35 人、と要件が厳しく実現困難で、特に技術的問題にすぎない場合にはあまり開廷の意味がなかった。そこで 1967 年 7 月 3 日法は、その尊厳さを失うことなしに要件を軽減した大法廷を置いたのである。構成員は、院長、部長 6 名、各部の最古参裁判官、各部の裁判官 2 名 (毎年院長が指名) の合計 25 名で、全員出席が要件である。大法廷が破棄して第三の下級裁判所に移送する場合には、大法廷の法律問題に関する判断には拘束力がある。他方、1 回目の破棄と同じ理由で破棄する場合であって、公訴による場合でないときは、原判決中の事実の証明・評価から可能な限り、自判することができる⁴⁶⁾。

40) ペロは①罰金供託制 (公平性という点で問題がある→1981年廃止。本稿152頁) ②控訴院の活用 (問題を破棄院から控訴院に移すだけというおそれがある) ③審理部を近代化し復活すること等を検討し、③が妥当とする。PERROT, op. cit., p. 217.

41) PERROT, op. cit., p. 224. なお、各民事部が担当する事件の種類については、山口・前掲書 349 頁。

42) とくに社会部は、長期間にわたり審査法廷を実施せず、公然と不満を示した。PERROT, op. cit., p. 225, n. 57.

43) PERROT, op. cit., p. 225. さらにプイエは、破棄院内部での判例不統一 (部の間だけでなく、審査法廷の間での不統一) のおそれを危惧している。POUILLET, op. cit., p. 369.

44) 山口・前掲書 351 頁。

45) PERROT, op. cit., p. 226. 山口・前掲書 351~2 頁。

46) PERROT, ibid. 山口・前掲書 353 頁。なお、破棄自判は、法の複雑化、法解釈統一の困難化、申立の増加等の理由から、本来法律審である破棄院に例外的に認められたのであるが、破棄院に第三審の役を認めたともみこともできる。山口・同頁。

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

- (c) 未決勾留補償委員会 (Commission d'indemnisation des personnes victimes d'une détention provisoire abusive)

個人の権利保障に関する 1970 年 7 月 17 日の法により、不当な未決勾留に対する補償の原理が創設された。破棄院の裁判官 3 名からなる委員会は、理由なしの判決で決定する。この委員会にも、申立件数の増加の問題がある⁴⁷⁾。

- (d) 再審 (révision)

一度言い渡された有罪確定判決の出た事件につき再度審理をする制度で、破棄院の刑事部が管轄する (刑事訴訟法 622~626 条)。これも、破棄自判の場合と同様に、破棄院が例外的に事実審理を行う場合である⁴⁸⁾。

(2) 司法行政機能

(a) 総会 (Assemblée générale)…破棄院の構成員全員による会議で、院長が主宰する。かつては裁判官の懲戒裁判機能を有していたが、1946 年憲法が司法官職高等評議会にその権限を移したため、現在ではもっぱら行政的機能を持つ。法文上機能が明確でないが、破棄院の運営につき協議・決定するとされている⁴⁹⁾。

(b) 理事部 (bureau)…院長、6 人の部長、検事総長、次長検事で構成され、書記長も出席する。任務は、破棄院の行政につき院長を補助し、一種の内部規則を制定したり (司法組織法 R131-1 条)、法廷の数・期間を決定したりする (同 R131-2 条)。要するに、院長のための機関である⁵⁰⁾。

(c) 資料調査部 (Service de documentation et d'études)…これは破棄院の組織ではなく、院長の監督下にある部局であるが、重要な行政事務を行うのでここに挙げておく。有益な情報の収集と、必要な研究を行う部で、特にすべての申立を体系的に分類し、破棄院その他の重要判例要旨を集めた中央資料室 (fichier) を管理す

る (そのためこの部は fichier と呼ばれることもある)。また、「破棄院判例集 (Bulletins de la Cour de cassation)」の編纂責任を負う⁵¹⁾。この部は裁判官の調査を容易にし、その時間を節約するために創設されたのであり、前述した調査官 (例外的には調査裁判官) もここで働く。重要なのは、破棄院の各部で誤って不統一な判例が生じないようにする機能であり、「中央資料室」の構想も、まさに民事部が分裂を始めた 1947 年に生まれたのである⁵²⁾。

(三) 破棄手続

では破棄申立は実際にどのようになされるのか。以下、刑事訴訟法に規定されている⁵³⁾刑事事件の手続⁵⁴⁾を中心に検討する。

(1) 破棄の対象

対象は、終審としてなされた裁判所の裁判である。したがって通常は、重罪院 (重罪の場合)、控訴院 (軽罪、違警罪の場合)、控訴院重罪公訴部 (chambre d'accusation) などの判決であるが (567 条)、そのほか、少年重罪院、少年事件を扱う控訴院特別部 (chambre spéciale) の判決なども対象となりうる⁵⁵⁾。しかし、司法上の裁判が対象なので、予審判事による非司法的決定のような行政的行為は破棄の対象にならない。また、まだ控訴が可能な判決のように終審裁判でない場合にも破棄申立はできない⁵⁶⁾。

(2) 破棄の手続

検察官のほかすべての当事者は破棄を申し立てることができるが、破棄は例外的な手段であるから、一定の形式が要求される。

〔破棄の申立 (declaration de pourvoi)〕

申立は、原判決言渡しの日から 5 日以内に (568 条①項)、原審裁判所の書記課において行う。書記が作成する証書に、書記、申立人本人、代訴士もしくは特別代理

47) POUILLE, op. cit., p. 378. 詳細は山口・前掲書 353 頁。

48) 詳細は山口・前掲書 353 頁、ステファニ・ルヴァスール・ブーロック (澤登他訳) 『フランス刑事法〔刑事訴訟法〕』 578 頁以下。再審の具体例については本稿 155 頁。

49) 山口・前掲書 351 頁。POUILLE, op. cit., p. 375.

50) PERROT, op. cit., p. 223, 山口・前掲書 349 頁。POUILLE, op. cit., p. 375 は、実際には、院の上級司法官のための討議・考察の組織だ、とする。

51) もっとも、判例集に登載されるのは、その判決を出した部の部長が公刊すべきだと判断だけである。POUILLE, op. cit., p. 374.

52) PERROT, op. cit., p. 223.

53) したがって以下に引用する条文は、ことわりのない限り刑事訴訟法のものである。

54) 民事については山口・前掲書『概説』354 頁。

55) ステファニ・ルヴァスール・ジャンプメルラン (澤登・新倉訳) 『フランス刑事法〔犯罪学・行刑学〕』 416 頁 (1987 年)。

56) MERLE et VITU, *Traité de droit criminel*, t. 2, p. 844.

人が署名し、特別代理人の場合には委任状を添付する (576 条)。

〔関係者への通知 (notification)〕

申立人は、3 日以内に、配達証明付きの書留郵便で、検察官と他の当事者に破棄申立を通知する。違反すると、後に通知を受けなかった当事者から、破棄院の判決に対する異議の訴えを受ける可能性がある (578～9 条)。

〔趣意書 (mémoire) の提出〕

申立時あるいはその後 10 日以内なら、原審裁判所の書記課に、趣意書を提出できる (584～5 条。10 日をすぎた場合については 585 条①項)。趣意書には破棄申立理由を記載し署名をする。

〔非収監者の申立権〕

6 カ月を超える自由刑を言い渡されかつ収監されていない者は、申立権を持たない (583 条)。これは、申立者に「収監される義務 (obligation de la mise en état)」を迫らせることによって刑の執行を確実にするためと考えられているが、破棄申立が原判決の執行力を停止する効果 (569 条) と矛盾するという指摘もある。また、原審に収監を免除してもらえば申立権喪失を回避できる⁵⁷⁾。

〔罰金供託義務の廃止〕

申立人には、申立の乱用を防ぐ趣旨から、罰金を供託する義務があったが、1981 年に廃止された (旧 580～2 条)⁵⁸⁾。

〔破棄院への書類送付〕

申立を受付けた原審書記課は、20 日以内に訴訟記録 (=①原審の謄本、②申立証書、③提出されているなら趣意書も含む) を検察官に送付する。この訴訟記録は、検察官から、破棄院検事総長を経て、破棄院刑事部の書記課にまわされる (587 条)。

(3) 破棄申立理由 (moyen de cassation)⁵⁹⁾

破棄の例外的手段たる性格は、この申立理由が厳しく

制限される点に最もよく現れている。また、この点こそ控訴制度との著しい違いである。次に列挙する申立理由を一語でいえば法律違反であるが、これが、破棄院の“下級裁判所における適正な法適用の保持”という本来の使命から生じてくることは言うまでもないであろう。

①下級裁判所の判決の法律違反 (violation de la loi de fond) (567, 591 条)…かつてオルドナンスの規定に違反する判決を無効とする制度であった破棄の沿革からみても、最も基本的な申立理由といえる。

②裁判所の構成の違法 (constitution irrégulière) (592 条)…たとえば、法定数を欠いた人数の裁判官が判決したとき、検察官の意見を聞かずに判決したときなど。

③管轄違 (incompétence)…たとえば重罪を軽罪裁判所で裁判した場合。ただし重罪院の場合には特例がある (594 条)。

④権限踰越 (excès de pouvoir)…管轄権はあっても、裁判所に権限がない場合。たとえば行政行為につき批判すること。

⑤方式違反 (violation des règles de forme) (593 条)…訴訟指揮が行われなかった場合、当事者や検察官の請求に対し判決をしなかった場合、判決に理由が欠けていた場合など。

⑥判決間の矛盾 (conrariété de jugements)…異なるもしくは同一の裁判所の間で出された判決に矛盾がある場合。もっとも、この場合、再審開始理由になることもある⁶⁰⁾。

(4) 刑事部での取扱

刑事部長は、裁判官の一人に報告することを委任する (587 条②項)。この報告裁判官 (conseiller rapporteur) は、申立人に弁護士がいる場合には、追加趣意書の提出期限を決める (589 条)。

報告裁判官は、訴訟記録を受け取り、破棄院内の図書室などで調査検討した後、報告書にまとめ書記課に提出する。この後は、当事者は追加趣意書を提出することができなくなる (590 条③項)。

公判廷では、まず報告裁判官が報告をし、必要な場合には報告の範囲内で弁護士の意見 (observation) をきき、さらに検察官の意見をきいた後に (602 条)、申立について判断がなされる⁶¹⁾。

60) MERLE et VITU, op. cit., p. 854.

61) MERLE et VITU, op. cit., p. 860.

57) MERLE et VITU, op. cit., p. 858.

58) 理由は、①罰金額が 1981 年で 100 フランと小額にすぎたためほとんど効果がなかった、②一部の者に免除が認められていたことが挙げられる。MERLE et VITU, ibid.

59) 申立理由 (moyen de cassation) と破棄開始理由 (cas d'ouverture à cassation) とは殆ど同義語であるが、厳密には、前者は、当該原判決に対し後者を具体的に適用したもの、といえよう。両者の違いにつき MERLE et VITU, op. cit., p. 854.

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

(5) 刑事部の判決

申立に対する刑事部の判断には、その内容によりいろいろなものがあるが、下の表 1 ①～⑥のように分類することができよう。

表 1.

I. 形式判決〔問題点を検討するまでもない場合〕

—A. 法律上の要件を欠く場合 (605 条)

① 申立権喪失判決 (arrêt de déchéance)〔申立の検討前に申立人が収監されていない場合など〕(567-2, 574-1 条)

② 受理不能判決 (arrêt d'irrecevabilité)〔原判決に破棄の可能性がない場合、申立人に申立の資格がない場合〕

—B. 申立の対象がなくなった場合 (606 条)

③ 判断不要判決 (arrêt de non-lieu à statuer)〔公訴の消滅(被告人の死亡、恩赦)、申立の取下など〕

—C. 判断を一時延期する場合

④ 延期判決 (arrêt de sursis à statuer)〔先決すべき抗弁に対する行政裁判所の判断を待つ必要がある場合〕

II. 本案判決〔問題点を検討した場合〕

⑤ 棄却判決 (arrêt de rejet) (607 条)〔申立に理由がない場合〕

⑥ 破棄判決 (arrêt de cassation) (609 条)〔申立に理由がある場合〕

(a) 破棄移送 (cassation avec renvoi)〔移送を伴う場合〕

(b) 破棄自判 (cassation sans renvoi)〔移送を伴わない場合〕

四 判例の 200 年

200 年間、フランス最高裁は、法律の間隙を判例で埋めて各時代の要請に答え、また、世間を騒がせた刑事事件に一定の判断を下して秩序を維持してきた。そこで、主な判例と刑事事件をたどることにより最高裁の実像にせまってみる。どんな判例や刑事事件を拾うべきかは一個の問題であるが、ここでは、記念展示会カタログ⁶²⁾に掲載されたものを取り上げる。フランス人自身が何を重要な判例と考え、何が記憶に残る事件だと思っているのかについての一個の回答が示されているように思われるからである。

(一) 主な判例

(1) 民事部判決 (Vernehec C/Arvengas, 7 mai 1828)

公証人から費用請求訴訟で裁判所への出頭を命じられた顧客が、管轄違いの申立をしたが、それを棄却された事例で、破棄院は、正当防衛の権利は自然権であるから、何人も、それを促されることなしに有罪とされることはない、との判断を示した。

(2) 刑事部判決 (Procureur général d'Orléans Dupin C/Quesnot et autres, 4 janvier 1839)

1839 年の一連の判例は、従来の決議に関する特別法を廃止して、普通刑法を適用すべきことを示した。たとえば、決闘によって生じた傷害・殺人も、ふつうの傷害・殺人と同じように処罰されることになったわけである。今考えれば当たり前のことであるが、当時としてはやはり一時代を画する意味を持った判例といえよう。

(3) 民事部判決 (Poitevin C/de Seraincourt, 29 janvier 1867)

本判決によれば、法外な手数料で借金交渉にあたった代理人は、取決めの拘束力をたのみにして、裁判官がその手数料を減額することに異議をとなえることはできない。つまり、裁判官は、委任執行のために決められた報酬を減額する権限をもつ、とされた。

(4) 民事部判決 (Compagnie générale transatlantique C/Zbidi, 21 novembre 1911)

海上運送中、しっかり固定されていなかった樽の落下により傷害を受けた場合、客は(不法行為責任ではなく)輸送契約を根拠に損害賠償権をもつ、とした判例。

62) 前注 2) 参照。

つまり、輸送者には旅客を無事に目的地に運ぶ義務があることが明確にされた。これ以後、判例は一定の契約につき安全保証債務を認めるようになった⁶³⁾。

(5) 連合部判決 (Veuve Jandheur C/Les Galeries belfortaines, 13 février 1930)

これは歩行者に対する運転者の責任に関するもので、わが国でもいわゆるジャンドゥール判決として有名である⁶⁴⁾。トラック運転者が不可抗力または別個の原因を立証できない場合、歩行者は、運転者のフォート (faute) を立証することなしに、損害賠償を請求できるとした判例で、いわゆる無生物責任法理が自動車事故にも適用があることを明らかにしたものである⁶⁵⁾。

(6) 民事部判決 (Dr Nicolas C/Epoux Mercier, 20 mai 1936)

患者に対する医師の契約上の責任を認めた判例。両者の間には、病気を治癒し、あるいは少なくとも慎重で注意深く、科学的な治療を行う義務が形成されるのであるから、この義務に違反した場合には、たとえこの義務を負う意図がなくても、(不法行為責任ではなく) 契約上の責任が発生する。逆からいえば、医師には最善を尽くす以上の義務はないことになる⁶⁶⁾。

(7) 連合部判決 (Dame veuve Villa, 15 juillet 1941)

これは、労働事故に関する使用者側の責任に関する判例で、労働事故における「宥如されない過失 (faute inexcusable)」の定義をしたことで有名である。社会保障法は、条文で定義をせずにこの過失概念を用いているので、本定義がそのまま使われている⁶⁷⁾。

(8) 刑事部判決 (Leroy, partie civile, 3 février 1972)

裁判所執行史 (huissier de justice) が、居住者が留守で戸締りをしてあった家に、暴力 (violence) を使って

侵入する行為は、その権限乱用であり住居侵入である、とされた事例。

(9) 合同部判決 (Administration des Douanes C/Sté Cafés Jacques Vabre et autres, 24 mai 1975)

本判決は、1957 年 3 月 25 日に EEC を創設したローマ条約は、フランスに直接適用可能な司法秩序をつつたのであり、憲法 55 条により、国内法に優越して適用される、とした。ローマ条約の国内法に対する優越性は、その後、憲法院 (Conseil Constitutionnel) にも事実上承認され、コンセイユ・デタにも肯定された。

(10) 民事部判決 (Mutualité industrielle et Desmares C/Charles et autres, 21 juillet 1982)

歩行者に対する自動車運転者の責任の推定を認めた判例。歩行者にフォートがあるとしても、運転者には、自分に予見可能性・回避可能性がないとはいえない以上、損害を賠償する義務がある、とされた。前述した (5) の判決の延長線上にある判決で、本判決により、運転者は不可抗力の場合のみ責任を免れることになった (= 運転者の責任の推定)。このような判例の交通事故の被害者を保護しようとする態度は、自動車事故に関する 1985 年 7 月 5 日法として結実していった⁶⁸⁾。

(11) 刑事部判決 (Fédération nationale des déportés et internés résistants et patriotes et autres C/K. Barbie, 20 décembre 1985)

リヨンにおける旧ナチス党員クラウス・バルビーの裁判は世界中に報道されたが、本判決はそれに関するものである。その意義は、第 2 次大戦後国際的に初めて、最高裁判所が「人道に対する罪 (crimes contre l'humanité)」を抽象的な形で定義した点にある。

(12) 大法廷判決 (Fondation Abegg C/Ville de Genève et autres, 15 avril 1988)

壁画は、性質上不動産であるが、その支柱 (support) から切り離された場合には、そのときから動産になる。

* * * * *

以上、わずか 12 の判例であるが、一定の流れが見てとれる。まず民事事件では、破棄院は、契約・不法行為の分野をとわず、弱者・被害者の保護に心を砕いてきたようにみえる。とくに不法行為の分野では、無生物理論

63) 山口俊夫『フランス債権法』218 頁 (1986 年)。

64) 本判決の詳細については、高橋康之「無生物責任—ジャンドゥール判決—」(前掲『フランス判例百選』115 頁)、山口・前掲書『債権法』128 頁、新関輝夫『フランス不法行為責任の研究』77 頁以下 (1991 年) 参照。

65) 拙稿「フランスにおける刑事過失と民事過失(1)」国学院法政論叢 7 輯 68 頁 (1986 年)。

66) 山口・前掲書『債権法』218 頁。

67) この点につき、拙稿「フランスの過失致死傷罪(1)」国学院法政論叢 9 輯 125 頁 (1988 年)。

68) 同法の位置づけにつき、新関・前掲書 238 頁、山口・前掲書『債権法』139 頁。

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

という独特の理論を形成して、交通事故の被害者の保護に尽力してきた⁶⁹⁾。次に刑事法の分野では、時代の流れにともなう犯罪類型自体や処罰感情の変化に可能なかぎり対応していこうという姿勢が読み取れよう。とくに、人道に対する罪への断固たる対決姿勢の中には、革命以来の人権尊重の伝統が息づいているように思われる。

革命以後、下級審の法解釈の統一を維持するという限られた権限の下で、フランス最高裁は、時には議会に立法を促すほどの意外に大きな影響を社会に与えてきたのである。

(二) 主な刑事事件

(1) ルジュルクーリオン郵便馬車強盗一事件 (1796 年 4 月発生)

夜 8 時頃、リオンへ軍用金を運ぶ郵便馬車が、パリを出てすぐに森の中で 4~6 人の強盗団に襲われ、御者らが殺害された。数日後、まず A とその仲間 BCD 3 人が逮捕された。その後、警察に所持品を取りにきた E と、たまたま一緒にいた E の友人ルジュルク (Le surques) も、警察に居合わせた目撃者の証言で逮捕された。裁判中ルジュルクは終始無罪を主張したが、A B と共に死刑判決を受け、C は 24 年の鎖拘禁刑、D E は無罪とされた。A は、ルジュルクは無実で、真犯人は別の P Q R S の 4 人だと告白したが、結局 A, B, ルジュルクの 3 人は死刑を執行された。ところが数カ月後、P が真犯人の一人だったことが判明し死刑に処せられた。また、残りの Q, R (ルジュルクに似ている), S も逮捕・有罪になり処刑された。

ルジュルクの家族は、19 世紀の間中、諸関係機関に再審を求め続けたが、没収財産の返還が認められただけだった。しかし本事件を契機に制定された 1867 年 6 月 17 日法は、死者についても再審の請求を認めることにした⁷⁰⁾。そこで破棄院はようやく事件を受理したが、翌年末、R の有罪とルジュルクの有罪とは相矛盾するものではないとされ、家族の申立は棄却されてしまった。

(2) フュアルデー元検察官殺害一事件 (1817 年 3 月発生)

ある夜、元検察官フュアルデ (Fualdès) 氏は、パンカル夫妻の経営する売春宿に連れ込まれ、拷問された後首を切られた。動機は、翌日その事務所が荒らされていたので一応物取りと考えられるが、復讐や秘密抹消などの線も考えられ、不明である。起訴された者が、2 人の有名人を含め 9 人もいたが、第一次裁判では、5 人が死刑 (特に 2 人の有名人は盗取加重)、共犯 2 人が終身強制労働、1 人が禁固 1 年となり、1 名のみ無罪だった。しかし 10 月破棄院は、多数の証人のうち 3 人につき宣誓上の瑕疵 (治刑法 317 条違反) があったとして破棄差戻した。翌春、第二次裁判は、共犯者 1 人を禁固 2 年に減刑したほかは、同じ結論だった。死刑囚の破棄申立は棄却され (但し 2 名のみは減刑された)、6 月に執行された。

本事件は、容疑者の多さ、動機の不明さ等から、多くの絵画の題材となり、本も出版された。

(3) マリー・ラファルジュ砒素毒殺一事件 (1839 年 12 月発生)

パリから片田舎の鉄工場主の所へ嫁にきた美貌のマリー・カペル (Marie Cappelle) が、ねずみ退治を理由に砒素を手に入れ、それを混ぜた菓子を実に出張中の夫シャルル・ラファルジュ (Charles Lafarge) に送り毒殺したという容疑で逮捕された事件である。

本件は、無味無臭の砒素の混入の存否をめぐり、当時まだそれほど発達していなかった「毒物学」が裁判の場に初めて登場した点で、犯罪捜査史上、非常に有名な事件となった⁷¹⁾。

はじめ、検察側の鑑定人は食物・胃の双方に砒素があったとしたが、弁護側の鑑定人は胃にはないと主張した。そこで検察側はあらためて死体を発掘し、著名な毒物学者 O 氏に鑑定を依頼し、死体に砒素が存在するとの結論を得た。そこでマリーは、広場でさらした後に終身強制労働という刑を科せられた (ただし、国王ルイ・フィリップが終身禁固に減刑)。ところが、遅れて到着

69) カタログ 81 頁は、破棄院の影響が大きい分野として、①民事責任②労働法③事業法 (droit des affaires) をあげている。

70) 齊藤誠二「フランスの刑事再審制度 (1)」成蹊法学 7 号 14 頁 (1974 年)。なおルジュルク事件につき、バーバラ・レヴィ (喜多訳)『パリの断頭台』201 頁 (1987 年)。

71) ちなみに 1992 年末、NHK 教育テレビで放映された「海外ドキュメンタリー・犯罪捜査の 100 年 ④」(ドイツ ZDF 制作) は、本事件を再構成したものであったが、このことから、本事件がいか

した O 氏の好敵手である R 医師は、あらゆる人体には砒素が含まれているという理論を明らかにした。これに基づき破棄申立がなされたが 1840 年に棄却された。52 年初め、病気のため出獄を許されたマリーは最後まで無実を主張しつつ 9 月に息を引き取った。

(4) オルシニー皇帝爆弾テロ事件 (1858 年 1 月発生)⁷²⁾

ナポレオン III 世の馬車がオペラ座近くを走行中、3 発の爆弾が次々と炸裂し、馬が倒れ、民衆の中の 8 人が死亡し 150 人が負傷したが、皇帝夫妻は無事であった。49 年の仏軍のイタリア派兵以後皇帝の暗殺を狙う者が多かったが、首謀者オルシニ (Orsini) もその一人でイタリア独立主義者 (当時イタリアは未統一) だった。

2 月に重罪院で死刑判決を受けたオルシニは、3 月に破棄申立をしたが棄却された。皇帝はテロ行為を減少させたいと思ったが、オルシニには恩赦を与えず、共犯者の死刑を減刑することにとどめた。

(5) 『悪の華』事件 (1857 年 7 月告発)

6 月刊行のボードレールの唯一の詩集『悪の華 (Fleurs du mal)』は、翌月のフィガロ紙の酷評をきっかけに、反道徳的反宗教的とされ内務省の告発を受けた。8 月の裁判で、半年前フロベールの『ボヴァリー夫人』を有罪にするまでにはいたらなかった検察官は、道徳に反する罪に該当すると主張した。判決は、6 編がそれに該当するとし、ボードレールは 300 フラン、編集者は 100 フランの罰金とした。ボードレールは控訴せず、61 年に新たに 35 編を加えて改訂版を出した。66 年上記 6 編を集めた詩集が刊行されると、編集者は (ボードレールは死亡) 禁固 1 年および罰金 500 フランを科せられた。1924 年の初版本販売の際に本が検察当局に押収されると、名誉回復のキャンペーンが始まった。もっとも回復されたのは、1946 年の法律が文芸作家協会 (Société des Gens de Lettres) に特別の再審請求権を認めた⁷³⁾後の、1949 年である。5 月 31 日破棄院刑事部判決は、詩集は何ら淫らな言葉を含まないし、1857 年判決は現実主義的にのみ解釈し象徴的意味を無視しており、恣意的だったとして、同判決を破棄し取り消した。

(6) ドレフュス事件 (1894 年 10 月逮捕)

ドレフュス砲兵大尉 (ユダヤ人) がスパイ容疑で逮捕されたが、12 年後に冤罪であることが明らかになっていった事件だが、あまりにも有名なので詳細は略す。ただ、破棄院との関係につきふれておくと、まず、軍法会議がドレフュス大尉に冷たい態度を取り続けたのに対し、破棄院はむしろ援助する側にまわった点を明らかにしておこう。その援助なしには冤罪が晴れることはなかったかもしれない。展示会ではかなりのスペースがドレフュス事件に割かれていたが、破棄院自身がこの点をかなり意識し自負していたからかもしれない。次に、その具体的方策として、再審制度の手續改革をうながし、リベラルな運用をはかったことが重要である⁷⁴⁾。

(7) ランドリュー女性 10 人殺害—事件 (1919 年 4 月逮捕)

4 人の子の父であるランドリュ (Landru) は、新聞広告で 273 名の女性と付き合ったが、そのうちの 10 名を殺害したとして起訴された。偶然、被害者の姉妹に、パリの店から出てくるところを発見されて逮捕にいたったが、予審に 2 年半を費やした。21 日続いた裁判はおおいに世間の関心を買ひ、誘惑の罠をはりめぐらしたランドリュの不可解な性格はパリ中の耳目を集めた。死刑判決を受けても、ランドリュは犯行を否定し、予審から判決まで、法的手段を駆使して冷静に自分を弁護した。パリ控訴院公訴部の判決や、ヴェルサイユ重罪院の判決に対しても破棄申立をおこなったが、棄却され 1922 年 2 月にギロチンにかけられた。

(8) ゴルギュロフ—大統領暗殺—事件 (1932 年 5 月発生)

ドゥメール大統領の暗殺者は、ロシアからの亡命者でゴルギュロフ (Gorguloff) と名乗り、逮捕された時「フランス共和国大統領を殺害したロシア共和ファシスト党総裁ポール・ゴルギュロフ博士の覚書」というノートを所持していた。弁護側は精神異常を主張したが、認められず、死刑が求刑された。破棄院刑事部は、被告人の行為は一個の殺人行為であるから、政治犯罪ではなく普通法の重罪として判断すべきだとし、破棄申立を棄却した。逮捕から 4 カ月後に死刑が執行された。

72) 拙稿「フランス警察の歴史」相模工業大学紀要 24 巻 1 号 119 頁 (1990 年)。

73) この制度への批判につき山口・前掲書『概説』364 頁。

74) 再審との関係につき安倍治夫「フランス刑事再審における〈新事実〉の意味」法律時報 37 巻 6 号 26 頁 (1965 年)。

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

(9) ノツィエール—尊属殺人—事件 (1933 年 3 月未遂, 8 月既遂)

一流会社の機械工の一人娘のヴィオレット・ノツィエール (Violette Nozière) は、複数の愛人を持ち、時には自ら売春をして自分の作り上げた地位を保持していたが、梅毒に感染していることを知ると、それは遺伝性のものだからといって両親に薬を飲むように説得し毒殺を試みた。1 回目は失敗したが、新しい愛人のために金が必要になり、2 回目に父親を毒殺した。パリ重罪院での裁判は (7) 事件と同様な反響を呼んだ。弁護側がヴィオレットは、12 才の時から泥酔した父親に乱暴されてきたのであり、決して母の死を望んだことはなかったと、情状酌量を求めたからである。この話は人々を魅了し、民事当事者は陪審院に寛容を求め、詩人は詩を書いた。だが 34 年死刑となり、破棄申立も棄却された。

しかし、42 年模範囚として減刑され、ついに 45 年には出獄。その後、良き母、良き妻となり、母親を引き取り、63 年には完全な復権さえ認められたが、66 年 51 才でガンにより死亡した。

(10) ドミニシー—英国人一家殺人—事件 (1952 年 8 月発生)

イギリスからアルプス近くにキャンプに来ていた夫婦と 12 才の娘の 3 人が惨殺された。川の中から凶器の猟銃が発見され、その所有者であり現場近くの牧場主であるガストン・ドミニシ (Gaston Dominici) 80 才が逮捕された。初め、現場で目撃された息子のギュスタブが疑われたが、目撃は父子で山崩れの被害を見に行ったときのものであり、ギュスタブも父親が発砲したと主張した。ガストンは警察の圧力で自白したり (すぐ撤回)、犯行再現時には自殺さえ試みたが、死刑判決を受けた後は無実を主張し続け、自ら破棄院にも足を運んだ。破棄申立は棄却されたが、90 才を前に恩赦を受けた。秘密は墓の中で、いまだに今世紀の大きな謎の一つである。

(11) ドゥヴォー—少女殺害—事件 (1961 年 7 月発生)

リヨン近くの肉屋の娘が、その地下室で、喉と腹を引き裂かれて発見された。当日現場で働いていた小僧のドゥヴォ (Deveaux) が逮捕されたが、彼は虚言症をもち 19 才なのに精神年齢は幼児程度で、警察の尋問にもおびえず自白した (すぐ撤回)。63 年、無実の疑いが濃かったためか、検察官はあえて死刑を求刑せず、懲役 20 年を科せられた。その後ドゥヴォは、刑務所の教悔神父

の支持をえて無罪を主張し、67 年には自殺をはかり、翌年にはハンガー・ストを行ったりした。破棄院に、司法大臣フォックスが、続いてフワイエ司法大臣も破棄申立をしたが棄却された。しかし 69 年、破棄院はカピタン司法大臣からの申立を受理し、リヨン重罪院の判決を破棄してディジョン重罪院へ移送した。第二次裁判で無罪を勝ち取ったドゥヴォは、旋盤工の職業適性証をとり、家庭を築いた。

* * * * *

以上の 11 の刑事事件を振り返ると、好むと好まざるとにかかわらず、破棄院がさまざまな歴史上の出来事に巻き込まれ、政治的にも社会的にも大きな役割を果たしてきた (あるいは果たそうとして他から干渉されてきた) ことが良く分かる。とくに再審裁判所としての破棄院は、無罪を主張する被告人にとって最後の砦であり、棄却 ((1) 事件)、破棄 ((6) 事件) さらに移送後の無罪 ((11) 事件) と結論は様々であるが、重要な働きをしている。

五 破棄院の実像

パリ滞在中、機会あるごとに破棄院を訪ね、フランス司法の頂点の現実の姿を実際に自分の目で見てきたが、一定の感想・経験を持つことができた。それについて述べるにより、これまでみてきたような歴史的イメージ、組織・構造という理論的イメージと合わせれば、破棄院の具体的なイメージがつかめると思う。

(一) 破棄院の内部

現在の破棄院は、その居をパレ・ド・ジュスティスの一角に占めているが、入口は、セーヌ川に面した側と、

その反対側（パレ・ド・ジュスティス側）との二箇所にある。後者を入ると、真っ直ぐにそれほど長くない廊下のがびているが、そのすぐ左手にあるのが破棄院刑事部の法廷である。そしてさらに数メートルも歩けば、同じく左手に、意外にカラフルなルイ 9 世（聖ルイ）の彫像を発見できる。その廊下は、この王にちなんでサン・ルイ廊下 (Galerie St-Louis) という名がついている。(図 1 の右中央)

(1) 刑事部の法廷

サン・ルイ廊下の入口に座っている警官に傍聴したい旨頼むと、構わないが面白くないという。それでもと希

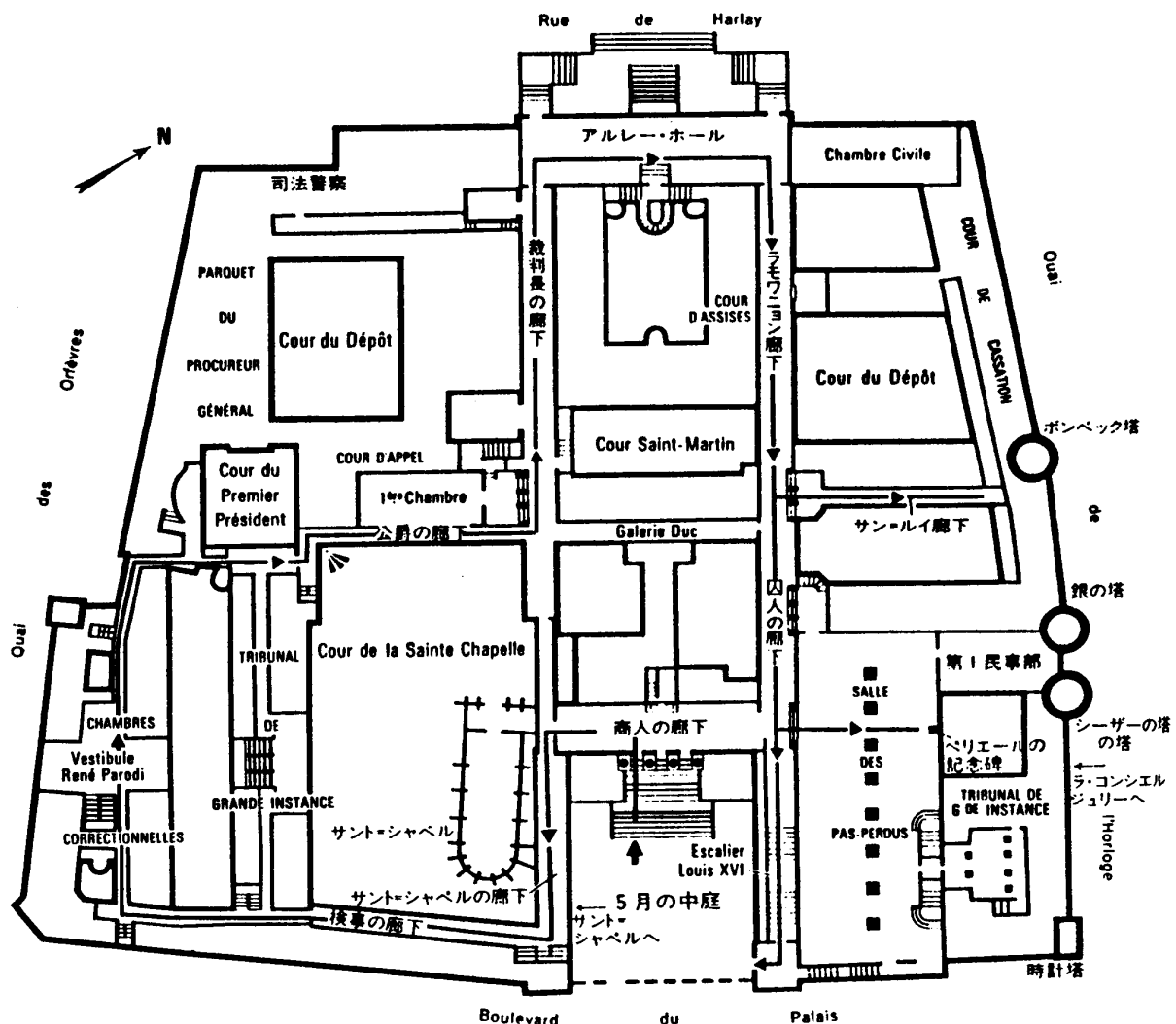


図 1 パレ・ド・ジュスティス（右上部が破棄院）

出典：ミシュラン・グリーンガイド「パリ」114 頁（1991 年）

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

望すると、今すでに法廷が始まっているので、きりのいい時まで少し待ってほしいという。しかたなくおとなしく待つ。警官は、変な奴だといわんばかりの目付きだったが、普通の観光客はめったに來ない所だから無理もない——などと考えたりしているうちに時間がきた。

身分証明書をあずけて、静かに法廷に入ると傍聴人は誰もいない。私と一緒に來た友人の 2 人だけである。予想に反して広い部屋に、これも予想以上の数の司法官があちこちにいる。6~7 人位だろうか、立ち話をしたり、座った書類に目を通したりしている。何人かの司法官がチラッとこちらを見たが、これまた一体何をしにきたのかというふうに見えた。これはこちらの勘繰りすぎだろうか、いずれにせよ、珍しい客ではあるようだ。

まず驚いたのは、傍聴席に座席がないこと⁷⁵⁾。高さ 1 メートル強の木製の仕切りで区切られてあるだけで、どうやら立ち見を強いられるらしい。

法廷は、昔の宮殿の一室を書斎風に改造したような部屋である。重罪院や控訴院の大法廷と比べるとその内装・大きさがかなり劣るが、それでも中世風のシャンデリアが下がる天井は金色に輝き、なかなか豪華である。傍聴席からみて、正面に裁判官席、左右の両端に相對面する形で一列に並んだかなり立派な机 (各 4 個くらい。検察官席だろうか?)、さらにその前にも簡単な机が一列 (2~3 個。書記席か?) ならんでいる。裁判官席と両端の机の隅には、クラシックな形のスタンドが規則正しく置かれており、黄色のガラス製シェードが内側からの光を受けて美しく輝いていたのが印象的だ。法廷内の雰囲気をとっても和やかなものになっている。

正面の両脇の扉は隣の部屋に通じているが、しばらくすると、その一つから裁判長のような人が登場した。この人が刑事部長裁判官であろう。しばし法廷内の人々と握手をかわしたのち、その裁判官が正面中央の席にすわると、各人も所定の場所につき、静寂が広がった。いよいよ法廷がはじまる。

両端の各席に陣取った司法官が、端から一人ずつ報告を始めた。分厚い一件書類を積んだ机に座ったまま、事件の内容、問題点、自分の意見などを簡潔に述べ、裁判長が判断をすると、次の人へ進む。右の列が終わると、

左の列へ移った。こうしてみると、言葉が早いし聞き取りにくく、また次々と処理されていくので正確にはよく分からないのではあるが、どうも、先程検察官席だと思っていた席は裁判官席だったようだ。各事件の報告者に指名された裁判官が、刑事部の部長裁判官にその報告をしていたわけである。そういえば、正面の裁判官がかなりの年配であるのに対し、報告をしている裁判官の中央にはかなり若く見える人もいる。

もう一人、他の報告裁判官の席とは少し異なる、大きな机を前にして座っていたのが、検察官だったのであろう。ほとんど話さなかった。意見を求められたとき、少し話したただけだった。

1 時間位経過しただろうか。法廷は思ったより短時間のうちに終わった。おそらくルーティン・ワークだったのだろう、少なくともその時は弁護士らしき人の弁論もなく、重罪院でみた法廷と比べると物足りない感じがしてしまった。法廷内の人々も特別の表情を見せることなく退室していった。なるほど、これが法律審といわれる破棄院の法廷の特色なのだろう。入口の警官が面白くないと言っていたのにも理由があったのである。

(2) 聖ルイ像

破棄院のルイ 9 世の彫像は、王冠を頭に戴き、王杖を左手にもって、目は正面をしっかりと見すえている。王たる威厳と聡明さを感じさせる表情である。頭上に、柏(chêne. 樅と訳されることもある)の木が配されているのは、ルイ 9 世が、ヴァンセンヌ城の森にあった柏の木の下で、自分に裁きを求めてくる人々の話を聞いた、というエピソードに基づいているからである⁷⁶⁾。右手を軽く上げているのは、何か判決を言い渡そうとしているところだからだろうか。このルイ 9 世とは一体どんな王だったのだろうか。

王は 1226 年 12 才 (11 才?) で即位したが、実際には、前王ルイ 8 世の妃でルイ 9 世の母でもあるブランシュ・ドゥ・カスティーユが摂政となり、王国を良く統治した。

王の成人後もしばらくは母が摂政を続けたが、1242 年頃からルイ 9 世が自ら政治を行うようになった。もっとも、48 年には十字軍に出発したが、54 年に無事帰国した。もともと知恵と権威をもって王国を支配し名君の誉

75) もっとも、ある写真では傍聴席に座席がうつっている (前掲注 2) 式典記録 108 頁) ので、筆者が傍聴したときは、何かの都合で座席が取り外されていたかもしれない。

76) 日仏法学会編『日本とフランスの裁判観』51 頁 訳注 (1) (1991 年)、ミシュラン・グリーンガイド『パリ (日本語版)』205 頁 (1991 年)。

れが高いが、とくに帰国後の善政は語りつがれてきたところで内政・外政にその才能を発揮した。たとえば、金貨を鑄造して経済を安定させたり、セーヌ河の運輸組合を援助したりした。

とりわけ司法の面での業績は大きい。司法の公正と権威を確保するために努力したことで知られ、現代でも司法のシンボルとして尊ばれている⁷⁷⁾。

また、王は大へん熱心なキリスト教徒としても有名である。パレ・ド・ジュスティスの敷地内にあり、パリ屈指のステンドグラスをもつ美しい拝堂として有名なサント・シャペルは、かねてから聖遺物を探し求めていた王が莫大な資金と引換えに入手した「キリストの荊冠」を安置するために建立されたものであることはあまりにも有名である。他方、聖地を異教徒から奪還するべく 2 度にわたり十字軍を率いて出国した⁷⁸⁾。初めての遠征では、エジプトで捕虜になったり、シリアで 4 年間過ごすことになったりしたが、母の死亡の報せをきいて無事帰国した。しかし 2 度目の遠征の時、出発してすぐ病気にかかり 1270 年チュニスに客死したが、死後、聖人に列せられた。聖ルイ王 (Sanit Louis) と呼ばれる所以である⁷⁹⁾。

歴代の王も聖ルイを模範とし、その制度を真似ることさえしてきたのである。司法だけでなく、宗教、財政、教育すべての面でその名が讃えられている。破棄院内に彫像が置かれたのは、もっぱら自ら民衆のために裁判をしたというエピソードによるものであり、司法の象徴として現在でも尊敬されているからであろう。しかし、その他にもフランス国内の各地に王を描いた絵画、ステンドグラス等が残っており、そのうちの一つには、王がら病にかかった修道僧に自らの手で食事を与えている図もある。聖ルイが、いかに多くのフランス人に慕われ、人気があったのかが偲ばれる。

(二) 式典と司法官の示威運動

1990 年 12 月 1 日、朝刊紙フィガロの 1 面に、その日の 13 時に英仏海峡下のトンネルが貫通するという記事の隣に、ある 1 枚のショッキングな写真が掲載された。座り込んだ司法官 (magistrat) が機動隊の手によって一人一人排除されている写真である。記事によれば、11 月 30 日の金曜日、パリのパレ・ド・ジュスティス内の破棄院で開催された 200 周年記念式典にミッテラン大統領が出席し祝辞を述べたのであるが、その時、その建物のまわりには約 2500 人の司法官、弁護士、裁判所職員が全国から集合し、一大示威運動を繰り広げたというのである。一体なぜこのような事件が起きたのであろうか。フランスでは司法官がストをするなどということが許されるのだろうか。興味を持った私はあわてて幾つかの新聞を購入してみた。総合してみると事件は次のようなものであった。

今回のストは、司法関係者の組織する諸組合が連体して組織したもので、200 周年記念式典でミッテラン大統領が破棄院に来る日を狙って、かなり以前から準備されたもののようである。周知のように、フランスでは司法官から警察官までも組合を組織することが許されているが、現在、司法官の組合⁸⁰⁾としては、司法官組合 (Syndicat de la Magistrature)、司法官組合連合 (Union syndicale des Magistrats)、司法官職業協会 (Association professionnelle des magistrats) の 3 つが存在している。それぞれは、いかにもフランスらしく、政治的・政策的立場を鮮明にしておき、司法官組合が左翼的・急進的なら、司法官職業協会が右翼的・保的保守的であり、司法官組合連合はその中であって穏健派の立場にたつという具合である。このうち、司法官職業協会 (APM) は、わずか 150 名ほどの団体ではあるが、時には右翼中の右翼とされるほど明確な態度を表明するため

77) ルイ 9 世が司法 (裁判) を柱として国を治めたことについては RICHARD, *Saint-Louis*, Fayard, 1983, p. 277 ets. 同書の英語版として, RICHARD (Tr. by Birrell), *Saint Louis*, Cambridge, 1992, p. 153-177.

78) ルイ 9 世の十字軍遠征については、グルッセ (橋口訳) 『十字軍』(文庫クセジュ・白水社) 71 頁以下 (1954 年)、橋口倫介 『十字軍』(岩波新書) 193 頁以下。とくに橋口論文では、ルイ 9 世の遠征はあまり評価されていない。

79) *Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse* (G. D. E. L.), 1984, p. 6405.

80) フランスの司法官組合が結成された経緯についてはジュリスト 409 号 100 頁 (1968 年)。諸団体の活動・規制等については江藤价泰「フランスにおける司法官の団体活動について」(和田・高柳編『現代の司法』1972 年所収) が詳しい。また、法的根拠については、フワイエ他 (山口編訳) 『フランスの司法』(1987 年) 112 頁の訳注 [1] (山口俊夫) 参照。なお、同書所収のリオンカーン (山口訳) 「『司法官組合』の経験——証言——」は、司法官組合が現実どんな問題に直面し、どんな活動をしてきたかを知ることができ興味深い論文である。

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

に、他の組合とはかなりの距離を置いている。その名前に「組合」の名を入れてないところからもわかるように、政治とは距離をおきたいとしており、今回も「名誉ある孤立」(splendide isolement) の立場をとってストには参加しなかったようである⁸¹⁾。

パリでは、パレ・ド・ジュスティス正面の五月広場の前で、多数の参加者が横断幕をかがげて氣勢をあげた⁸²⁾。さらに、建物の周辺だけでなく内部でも機動隊と衝突し⁸³⁾、参加者の中には警棒でたたかれ怪我をする者さえでたという⁸⁴⁾。そんな状況の下でも、多くの裁判官は少しでも当事者の利益になるようにと開廷することを熱望したが、実際には 1~2 時間遅延したり書類が返送されたりしてしまっただけである。

同様な示威運動は、パリ以外のフランス各地でも行われた。たとえば、マルセイユ、リヨン、リール、エクスでは、裁判所は最低限度の仕事しか行わず、パスティア、ニース、トゥールーズおよびフランス西部(レンヌを除く)にいたっては、裁判所の機能は完全に麻痺してしまっただけである。フロリ・メロジス等いくつかの刑務所でも、刑務官が施設の扉を閉ざしたり、拘禁者の移送を中止したりしたと伝えられる⁸⁵⁾。

では、このように大規模なストが行なわれた原因は一体何だったのだろうか⁸⁶⁾。ストの直接的な動機は、司法関係予算の少なさへの不満にあったようである。司法関係者の人員不足、諸施設の改善の遅延などへの苛立ちはかなり大きかったようで、たとえばリヨンの裁判所は、12 月 3 日から、財政の窮乏や人員不足から従来守られてこなかった法規をこれからは厳格に適用していくという「遵法」作戦を実施することを決定したという⁸⁷⁾。

次に、司法官の不満は、その地位、司法権の独立につ

いても充満していた。1981 年、当時のミッテラン大統領候補は、裁判官の独立を保障するために司法官職高等評議会(Conseil supérieur de la magistrature)に関する憲法条項を改正する計画を提示した。しかるに、その公約が果たされていないという不満である。たしかに、「大統領は、司法権独立の保障者である」という規定(憲法 64 条)は、とくに戦後英米法流の司法権概念に慣れていたわれわれ日本人から見るといかにも奇異な感じがする。この規定は、かつて大統領に万能の権力を求めたドゴール將軍の意思が、同將軍のために制定された現憲法の中に残滓となったものというべきで、今や行政権の長たる性格をますます強めている大統領が、司法権の独立を保障するということは困難であろう⁸⁸⁾。

破棄院内部の式典は、このようなまわりの喧騒にもかかわらず、順調に進行し、ミッテラン大統領の祝辞も無事終了した。しかし、それは必ずしも司法官の叫びを聞き入れるものではなかった。予算の額が「充分ではない」ことを認めて今後努力することを約束したものの、憲法改正については消極的姿勢を明らかにしたからである⁸⁹⁾。穏健派の司法官組合連合は、翌日、大統領がかつての公約を翻したことに不満の意を表明した⁹⁰⁾。

以上のような事件は、およそ裁判官が組合を組織するなどと考えたこともなかった私には、ショックであった。しかし、フランスの人々にとっても、この史上初の司法官による示威運動は、かなり衝撃的であったようだ⁹¹⁾。反対論者は、元々法律上は司法官のストは禁止さ

81) *Le monde*, 27 novembre 1990.

82) *Le figaro*, 1-2 décembre 1990 には、「五月広場」前の上空からの写真が掲載されている。

83) *France Soire*, 1 décembre 1990.

84) たとえば、パリ 10 区の小審裁判所の女性判事は地面を引きずられて暴行を受けたため、告訴した。*Le figaro*, ob. cit.

85) *Le figaro*, ob. cit.; *Le monde*, 2-3 décembre 1990.

86) この辺の事情については、大山礼子「司法改革」ジュリスト 974 号 38 頁(1991 年)、山本和彦・前掲論文(2)判例時報 1434 号 22 頁(1992 年)参照。

87) *Le monde*, 2-3 décembre.

88) この点および司法官組合側から見た司法官職高等評議会の問題については、前注 80) 掲載リオン論文 96 頁以下参照。

89) *Le monde*, 2-3 décembre.

90) *Humanité dimanche actualité*, 2 décembre 1990.

91) 例えば 200 周年関連の破棄院長インタビュー記事で、記者は、11 月 30 日のストに関する質問から始め、多くの質問をストにからめている。これはストに対する関心の深さとショックの大きさを示すものといえよう。*Le monde*, 29 novembre 1990.

また、パリ大学の犯罪学研究所で「刑事訴訟実務」の講義を担当していた検察官も、このストをあえて話題に取り上げていたが、これもショックの現れといえるかもしれない。興味深かったのは、破棄院長が右の新聞インタビューで、今回のストに明確な反対をしなかったことについて、「法律を守るべき司法官が、法律上禁止されている行

れている⁹²⁾のであるからやるべきでないとか、こんなことをすれば、却って司法官に対する国民の信頼を失うことになるので妥当でないと主張する⁹³⁾。もちろんこれはこれで一つの意見である。しかし、それでもあえてフランスの司法官が示威運動を行なったのは何故だったのか、それが本当に妥当なことだったのか、司法官とくに中立的立場にあるべき裁判官がこんなに積極的に行動することが許されるのだろうか——まったく新たな裁判官像を突きつけられて、大いに考えさせられた事件であった。

(三) 200 周年記念展示会

200 周年を記念する展示会は、破棄院の建物内の一部(第一民事部裁判官室、大法廷など)を公開・使用して、1990 年 11 月 27 日から翌年 1 月 27 日までの予定で開催された。

セーヌ河岸側の正面口から入るときに、金属探知機を持った警官 2 人に検査を受けたが、無事通過。内部の玄関ホールはやや小振りであるが、大理石の床が美しい。カーペットを敷いたゆるやかな階段を登ると、2 階が展示場になっており、時代順に展示物が並べられていた。

15 世紀のオールドナンスやエディ、ルイ 15 世のリ・ド・ジュスティス⁹⁴⁾の図、大法官ダゲソの彫像等々…美しかったのは、革命後(破棄裁判所の時代)の司法関係者の衣装のイラストである。下級裁判所の裁判官は現在と同様に黒い衣装だが、上級裁判所の裁判官は、白やブルーのすその長い服を着ており、昔のギリシャ人のようである。身分により腰にまく布、首から下げるリボン、頭にかぶる帽子などの形・色がさまざまで、現代の裁判官よりずっとカラフルである。

トロンシェ、カンパセレスなどの胸像や肖像画にまじってフランス人の大好きなナポレオンの絵が登場するの

は、彼がいわゆるナポレオン法典を編纂した栄誉を讃えてのことであろう。少々残念だったのは、カタログには出ているのに、フォースタン・エリの肖像画と、1791 年刑法典を発見することができなかったことだった。

昔の法廷場面の図や、パレ・ド・ジュスティス付近のイラストなどもたくさん展示されていたが、それらを見ていて、現在のそれらとあまり変わらないことを発見したときは、パリの歴史を感じさせられた。

おそらく破棄院の中で最も美しい法廷は、厳粛法廷⁹⁵⁾や諸儀式が開催される所でもある大法廷であろう。正面の一段高い席には、中央に破棄院院長の席が、その両脇に検事総長や各部部長裁判官の席が並ぶ。天井には、破棄院判事の前で天秤や剣を持った複数の女神が舞っている法賛美の図⁹⁶⁾が描かれている。展示物を見終わって突き当たりの扉を入るとこの法廷に出たが、あまりに美しいので写真を撮りたいと思い、そばの若い警官に尋ねた。即座にしかし柔らかい調子で撮影禁止だと言われてしまった。しかし、2 度目だったか 3 度目だったか見学を訪れたときには警官がいなかったのも、ためしに法廷から外に出ようとしていた初老の男性に聞いてみた。驚いたことに「もちろん撮れますよ。市民のものなのだから…」という答えだった。中の裁判官席で書類を山積みにして仕事をしていた方だった⁹⁷⁾ので、おそらく裁判官であろう。そのいかにも人権の国の人らしい考え方、自分が判断を下すのだという自信ある物腰、一外国人に対しても崩さない丁寧な態度——写真の許可を得たことよりもその人物に感動させられた。

一つ意外に思われたのは、この展示会が 2 月 3 日まで一週間延長されたことである。たしかに破棄院の内部に一般市民が自由に立ち入ることができるなどというこ

為をやることに対して、破棄院長ともあろう人が、なぜ明白に反対の意思表示をしなかったのか理解できない」と批判していたことである。

92) 1958 年 12 月 22 日オールドナンス。

93) 前述した APM がストに参加しなかった根拠もこれらの理由であった。前注 81) のルモンド紙参照。

94) リ・ド・ジュスティス(親裁座、新臨法廷などと訳される)とは、国王が出席して行われたパルルマンの裁判のことであるが、詳細については石井三記「第七章 18 世紀フランスの国王・法・法院」(上山安敏編『近代ヨーロッパ法社会史』所収)165 頁以下(1987 年)参照。

95) 厳粛法廷(audience solennelle)には、院長をはじめとする高級司法官が赤いローブに白てんの毛皮の肩かけという正装で出席するため、非常に華やかな雰囲気がある。そのせいか、その開催中の写真がよく雑誌等に掲載される。たとえば前注 2) のリテク版 iv 頁、式典記録 168 頁など。

96) 図版は、リテク版 ix 頁、式典記録 168 頁などに掲載されている。

97) ある破棄院判事に会う機会があって話を聞いたところによると「破棄院の建物は昔の宮殿を利用しているので、現在では手狭であり、各裁判官に個室が与えられる余裕はない。したがって、仕事は空いている法廷でやることもある。」とのことであった。

フランス最高裁判所の 200 周年とその実像 (上野芳久)

とはめったにない機会であるし、豪華な内装や装飾品を見るのは興味深いことではあるが、全体として展示物も地味であるし、法律家ならともかく一般市民が厳寒の中をわざわざ出かけて見にくるほどのものはないように思われたからである。しかし、何度か会場を訪れた印象では、見学者は若いカップルだったり、家族連れや老夫婦だったり、一般市民が多い。やはりフランス人は権利・司法などに対して常に興味を持っているのだろうか。

(四) 広報活動

最後に、破棄院の広報活動について触れておきたい。裁判所がなぜ広報活動をしなければならないのかと疑問に思われるかもしれない。私自身、裁判所と広報とは全く無関係だと思っていた。しかし、破棄院で2つの経験をして考え方が変わったのである。

第一は、破棄院の入口で「破棄院」というタイトルのビデオ・テープ⁹⁸⁾を発見し購入したことである。破棄院長や検事総長に対するインタビューなどを交えながら、破棄院の簡単な歴史、仕事の内容、各部の違いなどについて説明している 25 分程のカラービデオである。作成したのは教育関係の役所であるから、元々はフランスの青少年向け教材であろうが、外国語版もあるので外国人をも対象と考えているようだ。テープを見てみると、簡潔に破棄院の機能がまとめられており、フランス人の良い意味での裁判や人権に関する意識の高さが出ているような気がした。「人権を保護する国家機関を理解しようとする人々」と「理解してもらおうとする国家」という図式が頭に浮かんだが、もしそうであるなら、何と素晴らしいことだろう。

裁判は真剣かつ厳粛に行われなければならないと考えると、裁判所が広報活動を行うのは不謹慎な感じがしないでもない。しかし、元々裁判所を含めて国家の機関は国民のために存在するのであるから、国民にその機能を知らせることはたいへん重要なことであり、むしろ積極的に行われるべきではないか——このテープを何度も見るうちにそんな思いが強くなってきた⁹⁹⁾。

第二は、破棄院からある判決が出たことを知ったときの経験である。事件はいわゆる代理母 (mères porteuses) に関するもので、破棄院が初めてそれにつき判断を下したのである。約 1 年前にパリ控訴院判決¹⁰⁰⁾は代理母業を合法と認めたのだが、破棄院の大法廷は、それは人体の不可処分性の原則に反し、養子制度を変えてしまうものであるから、違法であるとした¹⁰¹⁾。フランスでは当時、代理母を斡旋する団体が存在していたため、各新聞はこの判決を大きく取り上げたのであった¹⁰²⁾。

これは大いに法律家の興味をそそる判決である。ぜひ判決文を入手したいと思い、パリ大学法学部の学生の友人に相談した。さっそく 2 人で判決雑誌社を訪ねてみたが「まだ早すぎる」との返事。せっかく破棄院の近くまできたのだから直接あたってみようということになった。どうせ駄目だろうと話しながら、破棄院入口の女性におそるおそる聞くと、なんと 60 フランの印紙を買って 3 階 (だったと思うが) 書記官室 (?) に行けばコピーをくれるはずだという。さっそく言われたとおりにすると「何に使うのか」と聞かれた。「パリ大学法学部の学生で、この判決に興味をもっている。」と答えると、その女性はにっこり笑って「印紙はいらないわ」とコピーを無料で一部くれたのである。

この体験は、破棄院は権威の固まりだという私が漠然と抱いていた偏見を (全部ではないが) みごとに打ち破ってくれた。おそらくそのコピーはプレス用のものの残部だったであろうし、後に公刊が予定されていたであろうから、そういう意味では何の問題もなかったため良い結果となったのかもしれない。しかし、印紙で判決文を入手する制度が置かれていることなどを考えると、ここでも、国民の知る権利をできるだけ保障しようとする姿勢を感じとることができたような気がした。

98) CNDP Video, *Cour de Cassation*, Centre national de documentation pédagogique, Ministère de l'éducation nationale, de la jeunesse et des sports, 1990.

99) ちなみに、アメリカ合衆国の連邦最高裁判所を見学したこともあるが、こちらは破棄院とは比較にならないほど、はるかに強烈な広報活動が展開さ

れていた。地下の売店には、連邦最高裁グッズが並べられ、最高裁判事の絵はがき、建物の写真集などはもちろんティーシャツまである。見方にもよるが、小学生から老人まで自由に見学にきてるところと考え合わせると、連邦最高裁は本当にアメリカ国民のものなのだという感じがした。

100) l'arrêt de la cour d'appel de Paris du 15 juin 1990.

101) l'arrêt de la cour de cassation du 31 mai 1991 (assemblée plénière).

102) *Le figaro*, 1-2 juin 1991; *Liberation*, 1-2 juin 1991; *le monde*, 2-3 juin 1991.

六 おわりに

パリに留学することができたことを契機として、破棄院の歴史をさぐり、現実の活動にも目をむけ、その建物を実際に訪ね、そしてまた、テレビ・新聞などによる破棄院（とくにその判決）の報道ぶりに接するなど、できるだけ多面的に破棄院を見ようと心掛けてきたが、その結果、文献だけから抱いていたイメージとは大分異なった破棄院「像」を把握できたように思う。

由緒ある宮殿の中の部屋で、毛皮つきのりっぱな衣装を身にまとったかなり年配の裁判官が、厳粛に裁判を行っている破棄院は、その外観のとおり、一定の権威と荘重さを伴っているし、またそうあろうと心がけているようにも見える。実際に滞在してみると想像以上に保守的なフランスという国の中にあっても、とりわけ破棄院を頂点とする司法府は、その法を守るという機能から生ずる生来的な保守性も手伝って、やはり相当に保守的であるという感否めなかった。

また、まるで第三審となってしまったかと思まごうばかりの破棄申立数の増加とそれへの対応に悩む破棄院、司法界全体の不満（たとえば、予算や人的・物的設備への不満、司法の地位の低さへの不満など）を受け止めなければならない地位にある破棄院——このような悩める破棄院「像」をも目の当たりにした。

しかし、近代化の波は確実にこの最高位を占める裁判所にも押し寄せているようだ。古い宮殿内の一部の部屋には、モダンなデザインのファイリング・キャビネットが設置されて事務の能率化がはかられ、コンピュータによる文献整理もなされている。あるいは破棄申立増加の悩みは、コンピュータ化によって解決されていくのかもしれない。

また、司法界への女性の進出もめざましい。下級裁判所では3人の裁判官がすべて女性という法廷にも何度も出くわしたし、大学法学部の教室も半分以上が女性であった。私のパリ滞在中の1991年、初の女性首相としてクレソン女史が任命されて話題になったが、破棄院ではすでに1984年に女性院長¹⁰³⁾を送り出していたのであ

る。破棄院の裁判官に更に多くの女性が進出していくのはもはや時間の問題であろう。

何よりも素晴らしいと思ったのは、破棄院に、国民とできるだけ積極的にコンタクトを持とうという姿勢が見られ、反面、国民の方も裁判・司法にかなりの興味をもっているように思われた点である。200周年記念展示会への関心の高さ、広報ビデオの存在、判決文入手の容易さについては前述したとおり。重罪院の傍聴では毎回のようには高校生らしき見学者をみかけた。テレビで毎日、身近な法律問題（実際にあった話をもとにしている）を題材にした法廷番組（法廷のセット内で、原告、被告の話をきいた裁判官が判決を下す）をやっていたのは、訴訟社会アメリカのテレビ番組の影響であろうが、これも市民の法律への関心の高さのあらわれといえるかもしれない。テレビでは、司法に関する問題についての討論番組（たとえば予審制度のようなテーマについて、司法大臣補佐、裁判官、検察官、弁護士、ジャーナリスト、作家などが討論する）も目にしたし、新聞・雑誌がそういう問題を取り上げることもある。

観察者である私自身が法律家であるという点を割り引いても、フランス国民の裁判・司法に対する関心の高さはかなり高いといえよう。自分の権利主張を積極的にするという国民性からそうなるのか、あるいは逆にそれこそが、国民の権利意識を高めているのか。いずれにせよ、われわれが破棄院から学ぶべきことは、まだまだたくさんありそうである¹⁰⁴⁾。

103) Madame ROZES は、1984年2月1日から1988年7月18日に次の Monsieur DRAI が就任するまで、破棄院院長であった。同院長については、森下 忠「フランス破棄院長のことなど」判例時報 1116号（1984年）。

104) 本稿では、脱稿後校正の段階までに接しえた文献（1992年末までのもの）も可能な限り、参照し引用してある。